



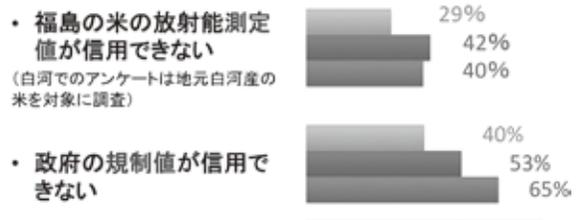
福島県白河市での適切な情報提供

入澤 朗
Irisawa Rou

1. はじめに

1つの新薬開発には約1,200万ページの正確な根拠情報が必要であり、その情報の品質確保が必須です。筆者は製薬企業に勤めており、約30年前からマサチューセッツ工科大学で研究されている情報品質 (information quality) にも取り組んできました。その経験から、35万tもの福島県産米の全量全袋検査のデータや情報の正確性に何か貢献できないかと、2012年3月に福島県の玄関口、白河市に初めて伺いました。そこで米に含まれる放射性物質の検査を行う農業関係者の方に「ボランティアで来てくれるのは有り難いが、自分たちに悪いことがあれば言ってください。今年は全量全袋検査に賭けています」という言葉を投げ掛けられました。複雑な状況下、悩みながらも先祖代々の米作りに真摯に取り組む姿勢を目の当たりにし、筆者は心を強く揺さぶられました。これが活動の原点になっています。

安全か安全でないかという前に、そもそも“福島県産米の全量全袋検査の数値を信用できますか？”と都内でアンケートを行いました (計69名)。その結果は40%の方が“どちらかという信用できない”との回答でした (図1)。そこで現地での全量全袋検査の品質管理の仕方をチェックし、実際に米袋の測定の様



上段: 白河のお母さん2013年6～12月情報提供なし(合計66名)
中段: 都内2013年3月情報提供あり(合計20名)
下段: 都内2012年秋情報提供なし(合計69名)

図1 都内及び白河市でのアンケート結果

子を動画で撮影しました。

ベルトコンベア式の放射性Cs濃度検査器の測定は基準値である100Bq/kgを超える可能性のある米袋をスクリーニングするのが目的であり、測定値の精度は高くないこと、親戚などが生産した縁故米を含めると100%完全に全量全袋検査できていると実証するのは不可能であることという課題はありましたが、適切に管理されていると判断しました。

都内でこの品質管理の説明及び放射性物質検査の動画視聴の後、アンケートを行いました (計20名) が、依然として42%の方が“どちらかという信用できない”との回答でした。既に新聞、テレビ、インターネットなどで様々な情報が溢れており、筆者らの説明を鵜呑みにすることはできなかったのでしょう。

2. 米の検査見学会と対話

説明や映像だけでは信用は上がらないことがはっきりしました。そこで今後どのような活動が良いのか、白河市内で農家、行政関係者、子育て中の父親、子育て支援団体の関係者に意見を伺いました。その結果、米の検査現場を見学できる機会を提供し、判断は参加者一人一人に任せるのが良いだろうという案に至りました。

①米の全量全袋検査見学会

2013年8月、行政や農業関係者の協力の下、初めて米の全量全袋検査のスクリーニング検査の見学会を開催しました。実際に30kgの玄米の袋をベルトコンベア式の検査器で測定し、自動的に米袋にバーコード及びQRコードが貼付される工程を見学しました。測定データは付属のパソコンからその日のうちに無線LANで福島県へ送付されます。QRコードを携帯電話で読み取ればその場で測定結果が確認できます。

この検査は基準値の100 Bq/kgを超える可能性のある米袋を振り分ける第1ステップのスクリーニング検査であり、機器に応じた測定値のばらつきを考慮したスクリーニングレベル(50~80 Bq/kg)を超えた米袋のみ第2ステップのGe半導体検出器にて詳細検査を行い、最終判定となります。白河市では2012年産米60万袋の検査において、定量下限値(25 Bq/kg)未満のものが99.92%であったこと、スクリーニング検査を通らず詳細検査となったのは4袋のみで、100 Bq/kg超えはなかったことなどの説明をしました。参加者からは、バックグラウンドの測定、塩化カリウム標準試料による機器の校正、未検査米が存在する可能性など様々な質問が相次ぎました。1回目の見学会は予定を超過し1時間以上に及びましたが、このような参加者の疑問、質問の一つひとつ答えることによって、参加者全員の理解が進んだと考えられます(図2)。

見学会の前後のアンケートに答えていただいた結果、ほとんどの方の信用が上がり、この見学会が初めて成果の表れた活動となりました



図2 見学会の様子(2013年12月)

お米の放射能測定の数値について 信頼できますか？

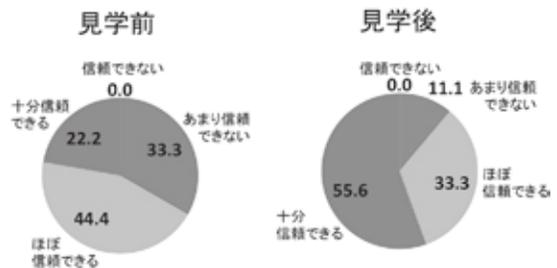


図3 見学会参加者(合計9名)のアンケート結果

(図3)。

②見学会後の対話

2013年12月、同様に第2回目の見学会を開催しましたが、見学会の後に場所を移して、広い雰囲気のある和室で4、5名ずつ3グループに分かれ“白河復幸”をテーマに、相手の発言を否定しないよう注意しながらワールドカフェ形式で対話を行いました。放射線に詳しい方、福島県内外の色々な立場の皆さんから様々な話、提案がありました。終了後もほとんどの皆さんがその場で1時間ほど対話をされていました。

③ボーム・ダイアログ

2014年4月、第3回目の見学会の後にも同様に和室で4、5名ずつ2グループに分かれて対話を行いました。当日は小さな子供を持つ地元

のお母さん、農業関係者、食品関係者、放射線の専門家（大学教授など）が参加されましたので、対話する上で安全な場を提供するため、“相手の話を否定しないこと”“この場の個人的な会話の内容は公言しないこと”というルールをお願いしました。また、今回は互いに情報の非対称性の大きい専門家と消費者が参加されましたので、できるだけ平等な立場で対話できるように以下2点もお願いしました。

1つは、専門家の先生も含め参加者全員にチューリップやテントウムシの形の幼稚園バッチに自分の呼び名を書いてもらいました。

もう1つはアインシュタインの理論でさえも“真実には限界がある”とする物理学者のデビット・ボームの対話の原則を示しました。ボームは、意図せず自身の理論が広島原爆に利用された経験などから、晩年思想家として、科学的な思考であってもこれを脇に置き相手の話を受容するという対話を提唱した学者です。

しかし、ファシリテーターの力量不足もあり、少数派のお母さんは普段接することのない人たちを前にして言葉を詰まらせる場面もあり、個人的な心情まで話すことはできなかったのではないかと思います。幸い、参加者アンケートの結果からは対話により色々な参加者の声が聴けたことを挙げる参加者が多く、大きな気付きや学びがあるようでした。

3. お母さんを主役とした座談会

米の検査見学会の後の対話には参加者自身の気付きや学びにつながる事が分かりましたが、消費者であるお母さんたちが子供を連れて見学会に参加することは難しく、また専門家を交えた対話ではお母さんが少数だと、どうしても本心はしゃべりにくいようでした。そこで、お母さんたちが大人数であり主役となれるよう白河市内で「ひとりじゃないよ」と支え合ってきた親子の居場所“たんぼぼサロン”の場へ放射線の専門家を招いて座談会を行うことを考えました。

専門家は、比較的若く自らも小さな子供を持つ、福島県出身の環境庁除染情報プラザの佐瀬卓也氏に依頼しました。佐瀬さんは、徳島大学福島支援プロジェクトサブリーダーとして3年間白河市で活動して、市内の幼稚園、小学・中学校で放射線の講義経験も豊富な方です。

たんぼぼサロンの代表、永野美代子氏と佐瀬氏には事前に一度面会をしていただきました。またお母さん方にはあらかじめ白河市での生活で心配していること、疑問に思うことを調査し、座談会当日の質問としました。このような準備により信頼関係が築けたことが成功の要因だったと思われます。

2014年7月、たんぼぼサロンに9名のお母さん方が集まり、佐瀬氏を囲んで座談会を開くことができました。当日は、白河市行政及び環境庁除染情報プラザからも2名ずつオブザーバーとしての参加がありました（図4）。

佐瀬氏は事前に集めた質問に1つずつ回答し、その場で疑問や質問があるお母さんは更なる質問をしました。内容は環境、健康、食品など様々でしたが、主に“子供たちが日頃遊ぶ環境での過ごし方”“白河市内の山や川を含めた環境での生活の仕方”“食料品の購入や食べ方”の3つとなりました。

座談会終了後は実際に外に出て、庭など周りの環境の放射線量の測定を参加者たちと一緒に



図4 座談会の様子（2014年7月）

座談会は、白河での生活に役立ちましたか？

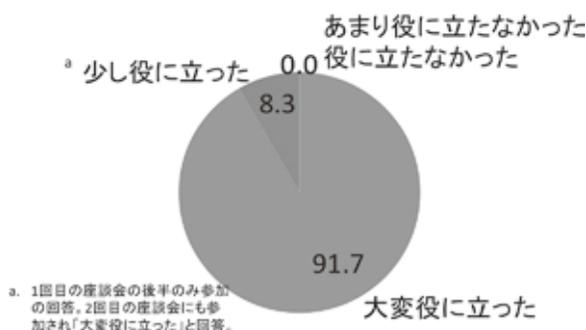


図5 座談会参加者アンケート結果（合計12名）

白河産米が気になりますか？

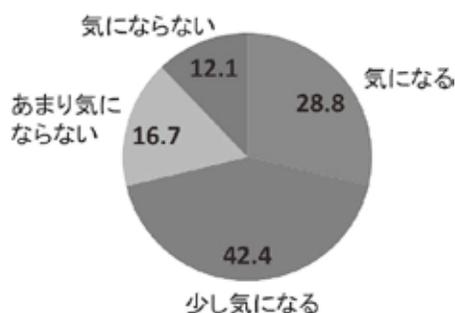


図6 白河市のお母さんのアンケート結果（合計69名：2013年）

行いました。

参加できなかったお母さんもいたので、同様に事前に質問を集め、2014年10月に2回目の座談会を行いました。この2回合わせた参加者へ“座談会が生活に役立ちましたか？”とアンケートした結果、全員から“大変役に立った”と4段階で最上位の回答を得られました（図5）。

2回目の座談会に参加したほとんどのお母さんはその場では“普段の生活であまり気にならない”と話されました。しかし、以前のアンケート調査結果では約70%のお母さんが白河産米について“どちらかという気になる”と答えています（図6）。原発事故から3年半を経過している現在、人前では不安な気持ちをなんとなく表に出しにくいのかもしれません。

佐瀬氏は専門的な知識を説明するというよりも、お母さん方の気持ちに寄り添いながら身近な生活環境の中でどのように生活するのが好ましいか具体的な話を座談会でしました。

情報品質は広義には“利用適合性（fitness for use）”と定義され、情報の受け手側が評価します。またR.Y. Wangらはその評価には合計15項目もの多次元性があると提唱しています¹⁾

データや情報の品質の多次元性

カテゴリ	次元
固有データ品質	信頼性、正確性、客観性、評判
文脈データ品質	付加価値、関連性、適時性、完全性、適量性
表現データ品質	解釈可能性、理解容易性、表現一貫性、表現簡潔性
利用性データ品質	近接容易性、利用安全性

出所：R.Y. Wangら編、関口幸毅監訳「情報品質管理」中央経済社（2008）

図7 情報の品質の多次元性

（図7）。相手へ正確に情報提供するだけでは不十分なのです。

座談会が一方的な情報提供や講義になることなく、お母さんとその子供たちの生活に役立つことが何よりも大切なことと考えています。

4. 求められていること

放射線の知識を持った専門家の存在は言うまでもなく重要ですが、福島県内で不安を抱えた方々の声に耳を傾ける親身な姿勢が大変重要です。決して安全キャンペーンになることなく、地元の方々の生活に役立てる情報提供には対話スキルが欠かせないと感じます。今、マルチプロフェSSIONALな人材が求められているのではないのでしょうか。

地元のお母さんたちを対象にした座談会とは別に、主に県外の方々を対象にした白河市へのツアーも行っています。米の全量全袋検査見学会だけでなく、白河市のお母さん方など地元の方の話に傾聴し、酒蔵での酒造り体験や利き酒会なども織り交ぜ、楽しみながら事実を見て聞いて体験し、参加者自身が判断するプログラムです。白河市は、栃木県との県境に位置しますが、首都圏、関西地方、海外と遠く離れるほど事実ではなく想像や印象で判断されているからです。

5. おわりに

筆者ら適切な情報提供プロジェクトは“膨大

なデータ、情報があふれる中で、福島県、白河市の米の検査見学会を通じ、そのデータ、情報、事実を適切に共有し、地元市民、県外の市民一人一人が考え、学ぶ機会を提供することによって、市民一人一人の生活に活かすことができる地域社会の実現”を目的としています。今後も行政、NPO など必要に応じて様々な団体と協力し、社会に貢献していきたいと思えます。

参考文献

- 1) 入澤朗, 医療と情報品質, 治療, 南山堂, **92** (4), 722-726 (2010)

(任意市民グループ 適切な
情報提供プロジェクト)